

真夜中三重丸

スーパーモテ期

~不思議なお守りで

ブサイクな俺がモテモテに~

プロローグ

1章 まさかの変化

2章 変わり始めた日常

3章 下着検査

4章 セクハラしても怒られない

5章 放課後王様ゲーム

6章 飛び入り参加水泳授業

7章 グラビア撮影

8章 保健室でのラブラブエッチ

9章 昼休みの3P

エピローグ

プロローグ

目の前には続々と登校してくる女子校生たち。

彼女たちは俺の姿を見るなり、睨んできたり、「キモい」とか「こっち見んによ！」などと口々に罵ってくる。

そんな彼女達を俺はただ黙って見ていることしかできなかった。

何故ならこの俺、田中翔太はこの学校の嫌われ者だからだ。

もともとはこの聖愛女学院とは別の学校で教職を勤めていたのだが、そこでも生徒たちから馬鹿にされていた。

理由は簡単で俺の顔がブサイクだから。

学生時代も男女関係なく散々馬鹿にされ続けてきたし、大人になった今でもそれは変わらない。

前に勤めていた学校でも毎日のように陰口を叩かれ続け、ついに我慢の限界に達した俺は退職届を出した。

しかし、生きていくためには働かないといけない。

たまたま教員採用サイトで見つけた、聖愛女学院の求人募集が目にとまり応募すると、あれよあれよという間に面接は終わり就職することができた。

聖愛女学院の教師になれると分かった時には歓喜したものだ。

しかし、採用後に理事長に呼び出され、採用理由について聞かされた時は愕然とした。

端的に言えば、俺がブサイクだから採用されたようだ。

聖愛女学院の生徒と教師は女性しかいないため男性教師を採用する場合、不純異性交遊の心配を一番に考えないといけないらしい。

過去にも教師と生徒の恋愛は問題になっていたようだが、俺はブサイクのためその心配はないだろうと判断され、採用となったようだ。

そんなことを理事長に言われても働き始めるまでは期待に胸が膨らんでいた。きつと可愛い女子高生たちに囲まれて楽しい学園生活が始まるに違いないと。

しかし現実是非情なもので、初日を迎えた俺は自分の甘さに嫌気が差していた。

「え！？不審者がいるんですが……」

「こっち見ないでください」

「先生が私たちを見るだけで気分が悪くなります」

朝のHR前の教室。

目の前に広がる光景はまさに地獄絵図だった。

机と椅子が並べられた空間に所狭しと女子たちが座っているのだが、その全員が嫌悪感丸出しの目つきでこちらを見ている。

思春期の女の子にとって30歳のブサイクなおっさんの視線なんて耐えられないものなのかもしれない。

それに、今まで女性しかいなかった空間に男が突然現れたんだから警戒されるのも無理はないと思う。

ただ……いくらなんでもここまで酷い扱いを受けるとは思わなかったけど……。女生徒たちの反応に心が折れそうになるが何とか持ち堪える。

ここでくじけてしまつてはこの先やっていけない。

「おはよう」

とりあえず挨拶してみるが返事はなかった。

代わりに冷たい目線が飛んでくる。

とりあえず事務的に自己紹介だけ済ませ、連絡事項を簡単に伝えると、俺は逃げるように職員室へと戻った。

もちろん初日以降も女生徒たちの態度が変わることはなかった。

働き始めて2ヶ月ほどたつが、いまだに俺に対する女生徒たちの対応は冷めたまままだ。

いつものように朝の校門前で登校してくる生徒たちに挨拶をする。

しかし、返ってくるのは冷ややかな眼差しばかり。

そんな状況でも何日か続けば多少は慣れるもので、可愛い女生徒に囲まれているだけで幸せだと自分に言い聞かせる。

特にお気に入りの女生徒なんかも何人か出来て、間近でその子の顔が見られるだけでも満足だと感じるようになっていた。

昔から馬鹿にされてきてメンタルが強くなったのだろうか。

そんなことを考えているとお気に入りの女生徒の一人が登校してきた。

彼女の名前は白川綾乃（しらかわあやの）。

身長は157cmでB92、W59、H88のHカップという抜群のプロポーションの持ち主だ。

髪は肩にかかるくらいの長さの黒髪。

顔立ちは整っており、目はぱっちり二重で鼻筋が通っている。

肌は透き通るように白く、頬はほんのりと赤みを帯びていて、ぷっくりとした唇がなんとも艶かしい。

彼女はグラビアアイドルとして活躍しているため3サイズも調べればすぐにかかった。

3サイズを偽っているグラビアアイドルも多いと思うが目の前の白川を見る限り本当のようだ。

ブラウスの上からでもわかる胸の大きさについ目を奪われてしまう。



「白川、おはよう……」

「……はあ、気持ち悪いんで話しかけないでください」

「あ、ああ……ごめん……」

「ホント、朝から最悪」

そう言うと、俺のことなど視界に入っていないかのようにスタスタと歩いていく。それでもめげずに登校してくる女生徒たちに次々と声をかけていると遠くからでも分かるほど目立つ女子生徒がこちらに向かってきた。

彼女の名前は宮下杏奈（みやしたあんな）。

身長は165ぐらいといったところだろう。

顔のパーツ一つ一つがバランスよく配置されており、少しつり上がった目が意志の強さを感じさせる。

人気急上昇中の読モで、それも納得な細身のスタイルに長い脚、それでありながら胸もしつかりと発育しており、Fカップはありそうだ。

しかし、彼女が目立つ理由はそれだけではない。

この学院には珍しい茶色に染められた長い髪にきれいな白い肌、そして耳にはピアスが光っていた。

さらにブラウスのボタンは3つほど開けられ、谷間が見えるほどの露出度である。スカート丈も膝上20センチほどとかなり短く、どこから見ても不良ギャルそのものといった格好をしていた。

そんな見た目をしているにもかかわらず、成績は優秀なため服装については校則違反だが許されている。

「視線がキモイんだよ、クソ教師」

「す、すまん……」

「胸見てるってバレバレなんですけど。セクハラで訴えてやるから」

「勘弁してくれ……」

「はあ……なんでこんなキモイ奴が担任なんだろ。早く辞めてくんねーかな」
吐き捨てるようにそう言い、宮下は去っていった。



このやり取りは既に日常茶飯事になっている。

周りの女性教員も呆れた様子でこちらを見ていた。

それでも授業や雑務をこなしいつものように帰路につく。

電車を降りいつもと同じ道を歩いていると古めかしい骨董品店が目に入る。

毎日のようにこの道を歩いているがなぜか今まで一度も気づかなかつた。

骨董品には興味はないがどうしても気になって店の中へ入っていくと、中はかなり薄暗く不気味な雰囲気があった。

店の奥へ進むとカウンターがあり店主らしき女性が座っている。

年齢は60代半ばといったところで、白髪を後ろで束ねており着物を着ている。

見た目は完全におばあちゃんなのだが、どこか凛々しい感じがする人だった。

「あの、すみません」

「何か用かい？」

「ここってどんなお店で……」

「ここは客に今一番必要なものが手に入る店だよ」

「えっと……どうのことですか？」

「店内をまわって商品を見てごらん。きっと気に入るものがあるから」

「はあ……」

店主の言っていることはよく分からなかったがとりあえず言われた通りに店の中を物色してみる。

食器セットや壺、置時計など色々置いてあるが特に欲しいものは見つからない。もう帰ろうと思った時、一瞬何かが光ったような気がしてもう一度棚の方へ近づいてみる。

そこには一体のお守りが置かれていた。

(これは?)

手に取ってみると表面に「恋愛成就」と書かれている。

今までこういう類の物は信じていなかったが何故かこれに惹かれてしまったのだ。

「それを気に入ったのかね？」

いつの間にか隣にいた店主が問いかけてくる。

「はい、何でか分からないんですけどこれがいいなって思っ……」

「それがあんたに今一番必要なものってことさ。買うかい？」

「はい、お願いします」

お守りを1000円で購入し店を後にする。

常に持ち歩いていた方が良いと店主に言われたためとりあえず財布の中に入れておくことにした。

家に帰り食事や風呂を済ませベッドに横になる。

今日も散々な一日だった。

明日も明後日も同じように辛い日々が続くのだろう。

そんなことを考えながら眠りについた。

1章 まさかの変化

翌日、いつものように歯を磨き朝食を摂って家を出る。

最寄りの駅へ向かう道すがら、昨日購入した恋愛成就のお守りを眺めていた。

「本当に効果があるのかねえ……」

半信半疑だったが、他に頼れるものもない。

とりあえず持つておくことにしよう。

そうこうしているうちに駅に着き、改札を通過してホームへと移動する。

通勤通学の時間帯のためホームは人で溢れかえっている。

列に並んでスマホを見て時間を潰していると何やら視線をかんじる。

周りを見渡すと何人かの女性と目が合ったがすぐに目を逸らす。

どうせ俺みたいなブサイクで冴えない男なんて目を合わせたくないのだろうと気にしないことにする。

しかし、その後も何度も視線を感じ、その度に振り返るのだが全て女性だった。

ただ俺が振り向くと慌てて顔を背けるのだが。

ブサイクだからという理由じゃなさそうな反応だがいったなんなのだろう。

そんなことを繰り返していると電車が到着し、人の流れに乗って車内へ入る。

大勢の人にドア付近まで押し込まれ身動きが取れなくなってしまった。

ドアが閉まり電車が走り出す。

一息ついて前を見ると目の前には一人のOLが立っていた。

タイトスカートにブラウスを着ていていかにも仕事ができますといった雰囲気だ。

身長は160cmほどで胸はDカップはあるだろうか。

髪はセミロングで黒髪で艶がある。

美人と言って差し支えない容姿をしており、スーツ越しでも分かる体のラインか

らスタイルも良いことが伺える。

彼女はドアを背にしていて、俺は向かい合う形で立っている。

満員なので痴漢に間違われないように空間をあける。

窓の外を眺めているとまたも視線を感じる。

ちらっと目の前のOLに目を向けるとやはりこちらを見つめていた。

上目遣いで頬はほんのりと赤く染まっている。

俺と目が合いハツとした表情を浮かべるとすぐに俯き恥ずかしそうにしていた。

「俺の顔に何かついてますか？」

「いえ、何でもありません……」

消え入りそうな声で答える。

しかし、視線は何度もこちらへ向けられていた。

そんな様子を観察していると急に電車が揺れて体勢が崩れてしまう。

ちよようど彼女の方へ向かって倒れこんでしまった。

お互いの体が密着し、胸の膨らみが押し付けられる。

それと同時に甘い香りが鼻腔を刺激する。

離れようとするが後ろから押し寄せる人の波によってうまく動けず、彼女に抱き

つくような形になってしまう。

彼女の体は柔らかく、顔を下げるとすぐそこに整った顔があった。

「すみません。すぐ離れますので」

何とか体を離そうとするが彼女は首を横に振る。

「私は平気なのでそのままでも大丈夫です……」

潤んだ目でじっと見つめられ、思わずドキツとする。

女性にこんな優しい言葉をかけられるのは生まれて初めてかもしれない。

俺に好意を持ってくれてるような態度に戸惑いながらもこのままの状態を維持することになった。

お互いに無言のまま時間が流れる。

ようやく目的の駅に着き、乗客の波に流されるようにしてホームに降り立つ。

彼女と離れることは少し名残惜しいとは思ったが、こんな男がいつまでも触れていては迷惑がかかると思い気持ちを切り替える。

「本当にすいませんでした。では失礼します」

早口で言うように逃げるとその場を去った。

駅から足早に学院へ出勤する。

職員室に荷物を置いて、校門で女生徒たちを迎え入れる準備をする。

今日も冷たい視線を向けられるんだろうなあ……。

そんなことを思いながら校門前で待っていると生徒が登校してきた。

「おはよう」

いつもであれば挨拶しても無視か辛辣な言葉が返ってくるだけなのだが今日は違った。

「え！？あ、おはようございます……」

なぜか女生徒は驚いた顔で返事をしてきて、そのままそくさと校舎の中へ入っていった。

その後も何人かの女生徒に挨拶を試してみたが驚いた顔をする子や、顔を赤らめてうつむく子がいたり、いつもと違う反応が返ってきた。

なんか今日はみんな様子がおかしいぞ……。

不思議に思っていると今度はグラビアアイドルの白川がやってきた。

「白川、おはよう……」

また何か言われるかもしれないが一応声をかけてみる。

白川は振り向いて俺の顔を見ると頬を赤らめ視線をそらす。

「お、おはよう……」

小さな声で呟いた。

それだけ言うと小走りで校舎に入っていく。

「お、おう……」

こちらにも驚いて声が出なかった。

な、なんだ？何が起きた？

予想外の出来事に動揺してしまふ。

何が起こっているのか分からないまま生徒に挨拶を続けていると、ギャルの宮下が通りかかる。

「宮下、おはよう」

「声かけてくんなって言ったよ、な……？」

宮下は俺を見るなり硬直した。

そしてみるみるうちに耳まで真っ赤になり、口をパクパクさせている。

「宮下……？」

「はあっ！……う、うるさい、また胸見てただろ……」

悪態をつくのが、明らかにいつもとは違う様子で、目線を合わせず下を向いている。

「見てないって……ほ、本当だって！」

「まあ、今日は特別に許してやるけど……」

いつもならもつと罵倒されるはずなのに、今日の彼女はなぜか優しくかった。

そのままスタスタと校舎に歩いていく後ろ姿を呆然と見送る。

その後も他の女子生徒に声をかけるが同じような反応が帰ってくる。

何か悪いものでも食べたのかと思うほど皆優しく接してくれるのだ。

職員室に戻り朝の会議中も同僚の女性から話しかけられたりして戸惑ってしまふ。今までに経験したことの無い状況に頭が追いつかない。

チャイムが鳴り朝のHR。

扉を開け担当している2年C組の教室に入る。

すると、クラス的全員がこちらを見て固まった。

白川と宮下も今朝と同じように頬を赤らめ目を潤ませているように見える。

やっぱりおかしいよな……。

疑問に思うが、とりあえず教壇に立ち連絡事項を伝えることにした。

朝の職員会議で言われたことを思い出しながら話を進める。

ざわざわと騒がしい教室内、相変わらず俺の話は誰も聞いていないようだ。

それでもいつもより心なしかみんなの視線が熱い気がする。

そんなことを考えながら話しているとあり得ない言葉が耳に入ってきた。

「え！？なんか今日の田中先生カッコよくない？」

耳を疑ったが、女生徒たちは口々に俺のことを褒めちぎっている。

「カッコいいどころじゃないでしょ。世界一だよ……」

「私もう好きかも……」

「それな、ヤバいよね」

「なんで今まで嫌ってたんだろう……」

「私もひどい態度取ってた……嫌われてたら生きていけないよ……」

ドッキリにしては手が込みすぎている。

俺は夢を見ているのだろうか。

その後はいろんなクラスで授業を行ったのだが、どこでも同じような反応だった。休み時間にトイレへ行こうと廊下を歩くだけで、すれ違う女生徒は例外なく振り向き、頬を染めながらうつとりとした表情をしている。

そんなことがあり得るわけがないのだが、実際にそうなのだから受け入れるしかないだろう。

確実に何かが起きている。

具体的に言うと、めちゃくちゃモテまくっている。

どうしてこうなったのか、考えられるのは……もしかしてあの恋愛成就のお守りのせいなのか。

とりあえずお守りを財布から取り出し眺めてみる。

一見何の変哲もないお守りだが、何らかのエネルギーが流れ込んでくるのを感じる……気がしないでもない。

本当に効果があるのか確かめてみないと。

学院内で試してみるのは失敗した時にリスクが大きいのので別の場所で試すことにしよう。

学院での仕事が終わる電車に乗る。

いつもと違う近くのターミナル駅で下車し、駅構内を歩き回る。

学校帰りの学生や仕事が終わりのOL、サラリーマンなど様々な人が行き交っていた。

その中の一人、スーツを着たOLに目が留まる。

年齢は20代前半で可愛らしい感じのする女性だ。

俺は彼女に近づくと意を決して声をかける。

「すみません、ちょっと良いですか？」

彼女は振り返ると俺の顔を見て固まり、顔を赤らめると俯いてモジモジし始めた。

「はい……なんででしょうか？」

上目遣いでこちらを見つめてくる。

その仕草がとても可愛いらしく思わず胸が高鳴る。

「あ、あなたがあまりにも可愛くて声を、かけてしまいました……」
女性にこんなことを口にするのは初めてで緊張するが、なんとか振り絞る。

俺の見た目なんかでナンパされても普通は邪険に扱われるはずだ。

しかし、彼女は頬を赤らめながら嬉しそうにしている。

どうやら成功したみたいだ。

「ふえ！？わ、わたしがかわいいなんてそんな……」

恥ずかしがりながらも満更でもなさそうだ。

「良ければ連絡先を教えてくださいませんか？」

「はい、もちろんです……」

ポケットからスマホを取り出してメッセージアプリのIDを交換する。

「また連絡しますね」

「はい……」

彼女は頬を赤くしながら小走りで行った。

その後、人妻や学生などいろいろな人に声を掛けてみたが全て成功してしまった。

間違いない、俺は全人類で一番のモテ男になっている。

信じられないような現象に感謝しつつお守りを購入した骨董品店へ向かう。しかし、昨日そこにあったはずのお店はなく、ただの空き地になっていた。やはりあのお店は普通のものではなかったようだ。

恋愛成就のお守りの効果が本物であることを確信することが出来た。

神様ありがとうございます。

そう心の中でつぶやきながら、俺は家路についた。

2章 変わり始めた日常

不思議な恋愛成就のお守りを手に入れてから俺の日常はガラッと変わった。

最初はあまりの変貌ぶりに戸惑う生徒もいたが、今ではすっかり学院のアイドルだ。

裏ではファンクラブが結成され生徒のほとんど会員、同僚の先生たちも入会済みというトンでもないことになってる。

「田中せんせい、おはようございます！」

「おはようございます！」

「おはよう、みんな元気が良いなあ」

朝の校門前でのあいさつ活動。

俺の顔を見るなり、登校中の生徒たちは駆け寄ってきて挨拶をしてくれる。

中には積極的に腕を組んできたりもする子も。

「先生おはようございます」

上目遣いで目を潤ませながら挨拶をしてくれる女の子。

これがイケメンだけに見せるメスの顔なんだなと実感する。

態度だけではなく、生徒たちの制服の着こなし方も変化していた。

少しでも俺に興味を持ってもらいたいのだろう、ブラウスのボタンを開けたりスカート丈を短くしたりする子が増えてきた。

白川も例外ではない。

以前はきちんと制服を着ていた彼女が最近胸元を大きく開けている。

スカート丈も膝上20cmはゆうに超え、白い太ももが露わになり、下着が見えそうになることも。

グラビアアイドルをやっている白川は自分の体がどれだけ男の欲望を刺激するか熟知しているのだろう。

特にHカップもある大きな胸は他の生徒と比べても圧倒的な存在感を放っている。

「おはようございます」

登校してきた白川は俺の腕に抱きつき、豊満な胸を押し当てながら挨拶をする。

「おはよう、白川……」

彼女の柔らかい感触にドキドキしながらも平静を装って挨拶を返す。

こんな美少女に甘えられるだけでも最高なのにさらに好意を持たれてると思うとニヤけ顔を抑えられない。

「今日もカッコいいですね……」

白川は頬を赤らめながら俺の顔を見上げ、目を潤ませる。

(なんだよこれ……幸せすぎるだろ……)

今までの人生で一度も味わったことのない幸福に身を委ねる。

「芸能人なんだから男にこんなくつついたらダメだぞ」

「えへへ、ごめんなさい」

頭を撫でながら注意すると、はにかみながら謝ってくる。

その顔は反則級に可愛かった。

「先生も生徒のおっぱいばかり見ちゃダメなんですよ？」

そう言うと白川は胸元をパタパタさせながら誘惑してくる。

「これは男の本能なんだよ……許してくれ……」

そう言いながらも視線は胸の谷間に釘付けた。

「仕方ないですね、許してあげます」

そう言って白川は悪戯っぽく微笑んだ。



「ほら、教室に行かないと。授業始まるぞ？」

「はあい……」

名残惜しそうな様子で俺から離れ校舎の中へ入っていく。

以前の白川は男なんて虫ケラくらいにしか思っていない態度で、男性ファンに対しても辛辣な対応しかとらないなんてネットに書き込まれていたが好意を寄せる相手にはまるで別人のように変わるようだ。

そんなことを考えながら次々と登校してくる女生徒と挨拶を交わしていると時間が経つのはあっという間で職員室へ戻る時間になった。

午前の授業が終わり昼休みの食事を済ませ授業の準備を行う。

廊下を歩いて教室に向かっていると宮下が歩いているのが見えた。

茶髪でスタイルが良くスカート丈もこの学院で一番短い彼女は遠くからでも目立つ。

ひらひらと揺れるスカートに釣られてついつい後ろに付いて歩いてしまう。

歩くだけで見えてしまうんじゃないかと思うほど短かい。

そのまま宮下の後をついて行くと、階段に差し掛かる。

1段、2段と登る度に期待が高まる。

どンドンと階段を登っている宮下の後ろで息を潜め、待ちきれなくなりつい体がかがめて覗き込んでしまう。

すると目の前にピンクの紐パンが飛び込んできた。

布がお尻に食い込んでおり、ぷりんとしたお尻の形がくつきり出ている。

階段を登るたびに尻肉が左右にプルンと震え、エロティックな雰囲気醸し出していった。



そんな天国から目が離せるわけもなくじつと凝視していると、ふいに宮下がこちらを振り向きニヤツと笑みを浮かべた。

慌てて視線を外すが、時すでに遅し。

「せんせえ、どこ見てたの？」

「いや、別に……」

「スカートの中覗いてたのバレバレだから？へ・ん・た・い」

「す、すまん」

「感想は？スカートの中はどうだった？」

「少し食い込んだパンツがすごくいやらしくて……尻肉がぷりっとな出て……興奮した」

「うわあ、きつても♡めちやくちや見られてたんじゃん」

「ああ、悪い……我慢できなかったんだ……」

「まあ、せんせえなら許してあげるけどさあ」

「ありがとう」

ギヤルで気が強い宮下も今ではすっかり甘々な態度を見せてくれるようになった。前はパンツを覗こうものなら罵声を浴びせられ殴られていただろう。

しかし、今はパンツを覗かれたことをむしろ喜んでるように見える。自分に少しでも興味を向けてもらえることが嬉しいのだろう。

今の宮下ならちよつとエッチなお願いでも聞いてくれるかもしれない。

そう考えるといっても立ってもいられず、思い切って少し甘えるようにお願いしてみよう。

「宮下のパンツ、前からも見たいなあ」

「うわあ、せんせえヤバすぎでしょ♡生徒のパンツ見たいとかマジ変態じゃん」
そう言う宮下の表情はどこか嬉しそうに見える。

「頼むよ……」

懇願するように頼み込む宮下は呆れたような顔をしつつも口元は緩んでいた。

「仕方ないなあ、ちよつとだけだからね？」

スカートの裾に手をかけ、ゆっくりとたくし上げる。



「これで良い？」

「もっと上まで上げてくれないかな？」

「はいはい、分かったってば……もう、ほんとしようがないなあ……」

宮下は恥ずかしそうに頬を赤らめると、顔を背けながらさらにスカートを捲り上げた。

生唾を飲み込みながら、眼前に広がった桃源郷を目に焼き付ける。

先ほど後ろから見たときより近い距離で見るそれはあまりにも刺激的すぎた。

「はい、おしまい。もう終わりだから」

スカートの裾を元に戻してしまふ。

「ありがとう……すごく良かった……」

「せんせえ、キモ過ぎだって……あー、恥ずかし……」

「今度また見せてくれないか？」

「もー、調子乗るなつての！次は絶対に見せないから！」

そう言いながら宮下は照れてそっぽを向いてしまった。

「それじゃあ、あたしは行くから」

「ああ、ありがとう」

「んじゃねー」

宮下は手を振ると笑顔で教室の方へと戻って行った。

その笑顔はあまりにも可愛くて、俺はしばらくその場に立ち尽くしてしまった。